

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 田岡 耕哉

所属: 世田谷区立希望丘小学校

記録日: 2016年2月3日

キーワード: 「自閉症」「社会生活」「個別指導で学習した事を一斉指導で活かす」

【対象児の情報】

○学年 小学校2年生

○障害名 自閉症 発達性協調運動障害

○障害と困難の内容

- ・教員の1斉指導で活動することが難しいが、個別の指導で活動することはできる。
- ・1斉指導の場面で落ち着かない為に話を聞きもらし、次に何をしたらよいか解らなくなることがある。そのため、保護者が付き添いながら学校生活を過ごしている。
- ・学習課題では、運動は模倣をすること、計算問題を素早く解くこと、細部に気を付けて漢字を書くこと、自分の思いや気持ちを伝えることが苦手である。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・学校生活に対する不安を減らすために見通しをもたせる。
- ・「できることを増やす」ことで自己肯定感を育て、意欲的に課題に参加する。
- ・苦手な学習課題に対する解決方法を自分なりに見つける。

○実施期間 平成27年4月～平成28年2月

○実施者 田岡 耕哉 野口 充子

○実施者と対象児の関係 通級担任 週2回小集団指導2時間、個別学習2時間（田岡、野口1時間ずつ担当）

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・通常学級では、保護者が本児の傍にいながら声かけして、課題を行っている。
- ・通級学級の個別学習や小集団学習は教員の声かけでほぼ課題を行うことができている。しかし、教員の話や周りの様子を見て1人で行動に移すことは時間がかかる。
- ・学習では、国語や算数テストはほぼ80点以上とることができる。
- ・計算問題に時間がかかり、算数に抵抗感がある。
- ・視線や手先の使い方に難しさがああり、字を書く、板書を写すのに時間がかかる。
- ・他の人との関わり方がわからず、自分の気持ちや考えを伝えることが苦手である。
- ・台本を見ながら日直のあいさつをする、ワークシートを使って自分の考えを言うなどはできる。

○活動の具体的内容

学校生活に対する不安を減らすために

①時間を確認することで見通しをもつ。⇒「タイマー機能」

②学校の行事予定や時間割を確認することで見通しをもつ。⇒「ClassTimetable」「カレンダー」

苦手な学習課題に対する解決方法を自分なりに見つけ、できることを増やし、自己肯定感を育てるために

③学校生活で次に何をすればよいか解る。⇒「レベルアップ To Do」

④運動会の踊りを録画して、踊りの再生速度を変えて覚える。⇒「ウゴトル」

⑤板書を写真に撮り手元に置いて、書く。⇒「カメラ機能」

⑥止めやはね等に気を付け漢字を覚える。⇒「筆順漢字辞典」

⑦計算を速く解く練習をする。⇒「あんざんマンと算ストーン」

⑧自分の思いや気持ちを知ってもらう。⇒「かめら絵日記」



○対象児の事後の変化

①時間を確認することで見通しをもつ「タイマー機能」

本児は、時間の見通しがつかず、集中して1人で宿題に取り組めないことが多かった。そこで、6月から集中して1人で宿題に取り組むための練習をした。1人で授業に参加することも想定し、環境調整した中で「タイマー機能」を保護者と一緒を使って「20分勉強→休憩5分→20分勉強」という枠組みで宿題や自学をすることにした。時間の見通しをもてることで、課題に取り組めるようにしていきたいと考えた。

学校では、家で練習したことを活かして、自分なりに授業や休憩時間をタイマーで決めた。タイマーを使うことで少しずつ気持ちの切り替えができるようになっていき、授業中の離席が減った。家では、自分でタイマーを使い、宿題を集中して行うことができるようになった。

②学校の行事予定や時間割を確認することで見通しをもつ「Class Timetable」「カレンダー」



図2 時間割管理

本児は学校生活に見通しがもてずに、次に何をすればよいかわからなくなり、周りの人たちに助けをもらうことが多かった。そこで、「カレンダー」を使って、家の用事や学校の行事を1週間、1ヶ月のスケジュール管理(図1)、「Class Timetable」を使って、1週間の時間割管理(図2)を保護者に入れてもらい、毎朝、一緒に予定を確認した。

1日の予定が解らないで落ち着かなくなることはほぼなくなった。

図1 1週間のスケジュール画面

③学校生活で次に何をすればよいか解る「レベルアップ To Do」



図3 レベルアップ To Do 家でやるべきこと

家では、生活表を使っても、計画通り生活を送ることができず、その都度、保護者の声かけが必要だった。そこで、「レベルアップ To Do」を使って、画面(図3)を見て、何をすればよいか見通しをもたせ、1人で行

えるようにした。ポイントがたまり、レベルがアップすることで、1人でできるという自信をつけさせたいと考えた。

学校では、周りの人たちに声をかけてもらって、生活していることが多い。家と同様に「レベルアップ To Do」を毎日使って、最初は保護者と一緒に画面（図4）を見ながら、何をしたらよいか見通しをもたせて少しずつ取り組ませるようにした。家での朝の支度、学校での朝や帰りの準備を1人で行うことができるようになってきた。保護者からも「準備はゆっくりだけれど、何をしたらよいかわかるみたいでよかった。」と話があり、本児にとっても有効なアプリだと感じた。



図4 レベルアップ To Do
学校でやるべきこと

④運動会の踊りを録画して、踊りの再生速度を変えて覚える「ウゴトル」

9月から運動会練習が始まった。昨年度の運動会の踊りは、教員が傍につきながら踊った。本児に運動会練習について聞くと、「踊りが難しい。1人で踊れるようになりたい。」と言った。学校だけでなく、家での練習も必要だと考えた。そこで、iPadで踊りの見本を撮り、「ウゴトル」（図5）を使って自分が覚えやすい速度に変えて家で練習するようになった。振付を覚え、運動会当日は1人で最後まで踊ることができた。

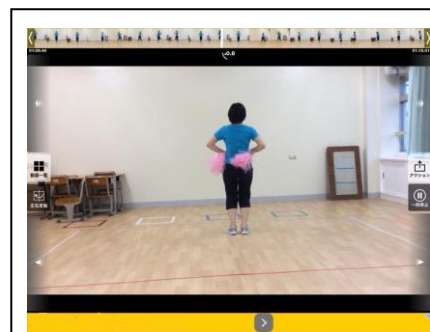


図5 ウゴトルの画面

⑤板書を写真に撮り手元に置いて、書く「カメラ機能」

学習支援や補教での本児との関わりから、保護者が不在でもその時間にやるべき課題がわかること、本児の様子に合わせて声かけをすることで、ある程度与えられた課題を行うことができるようになった。本児に授業の見通しをもたせること、見てわかりやすい板書、適宜な声かけが必要である。また、本児は、読んで理解する力は年齢同等以上の力があり、正確に書けていない文字が書け、板書の写しができれば、比較的落ち着いて学習に取り組むことができることがあった。そこで、そのような場面を増やすために、「カメラ機能」を使って、本児1人で、板書を写真に撮り手元に置くことで、書くことへの負担を減らすようにした。特に、国語や算数の板書、連絡帳を写す際には写真を撮り、拡大して書き写すようにした（図6）。

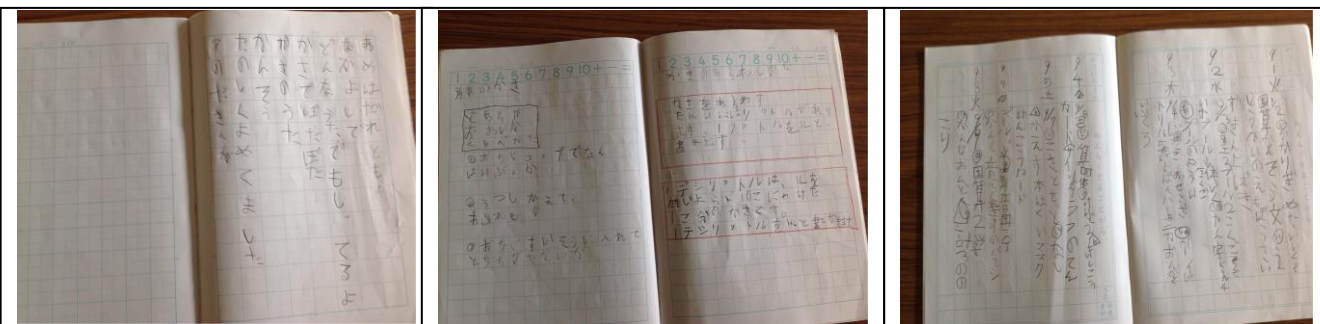


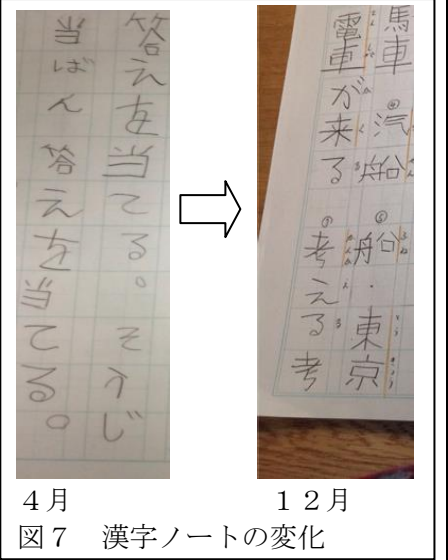
図6 カメラ機能を使っての写し

1人で授業や連絡帳等の板書を、毎時間写真に撮り、写す場面が増えた。本児から「黒板の字をカメラで撮っておくと、消されても安心だからよく使うよ。字が大きくできるから見やすい。」と話してくれた。

⑥止めやはね等に気を付け漢字を覚える「筆順漢字辞典」

書字では、字の細部を捉えて記憶することが難しく、画数が多い漢字を思い出せず、見本を見て書くことがあった。何度も練習をしても、漢字テストになると、止めやはね、細部等に間違いがあり、なかなか満点を取ることができなかった。そこで、「筆順漢字辞典」を使い、iPadの画面を見ながら書き順の確認をしたり、止めやはねに気を付けて指書きを行ったりして、漢字を覚えるようにした。

以前に比べて、整った字を書くこと（図7）ができるようになり、漢字の小テストでは満点を何回も取ることができた。



⑦計算を速く解く練習をする「あんざんマンと算ストーン」

本児は、計算問題を速く解くことが苦手なため、算数の授業や朝の計算タイムは進んで参加することが難しかった。「算数の問題を見るとやりたくないと思ってしまう。」と話すことがあった。そこで、通級学級で教科書の予習を行うのと同時に「あんざんマンと算ストーン」を使い、ゲーム感覚で計算問題を解くことで、計算のやり方を覚えるようにした。

以前に比べて、保護者が傍にいらなくても、自分から朝の計算タイムで計算を行うようになり、問題を解く量が増えた。

⑧自分の思いや気持ちを知ってもらおう「カメラ絵日記」

4月初め頃は、本児から話しかけることが少なく、話しかけられたことに応答しないことが多かった。話すことは苦手であっても通常学級での朝のスピーチの時間は自分のことを知ってもらいたい良い機会であると考えた。本児は生き物や絵にとっても興味があり、知識が豊富である。通級学級でも生き物や絵の話を通して他の児童と関わることもあった。そこで、家庭で興味のある生き物、テーマに合う写真、本児が描いた絵や工作等の画像を取り込み、話したいことを「カメラ絵日記」に入力し、テレビや黒板に写す、iPadを他の児童に見せながら簡単な言葉で相手に言うことを目標に取り組ませた。朝のスピーチでは、絵日記をプロジェクターで投影することにした（図8）。



朝のスピーチでは、他の児童に解るように最後まで発表することができた。他の児童から「写真があつてわかりやすかった。」「くつが本物に見えた。」等、様々な感想があり、本児のことを知ってもらいたい良い機会になった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

・iPadを活用した視覚提示があることで、学校生活や時間の見通しをもち、苦手な学習課題に対する解決方法

を見付けることができた。保護者がいなくても授業に参加できる時間が増えた。

・以前に比べて自分なりの方法で学習課題を行う場面が増えた。

・エビデンス(具体的数値など)

・iPad 導入時は、保護者がほぼ付き添っていたが、6月中旬に学校生活に対する不安を減らすためにアプリを本格的に活用し始めた。1日の予定を確認すること、学校生活や学習課題でできていないことを家庭でiPadを活用して自分のペースで練習することで、少しずつ離席が減り、学校生活や学習課題に活かすことができ、自信が付いてきた。10月初旬と12月初旬に、運動会や展覧会などが理由で落ち着かず、保護者が付き添う場面が増えた時期もあった。一方で、学校行事が

少ない月は「お母さんがいなくても大丈夫。」と言うことが何度かあった。12月2週目からは保護者が付き添わなくても1週間のうち半分を1人で授業に参加することができた(図9)。その様子を頑張りカード(トークンエコノミー)、通級学級の話やワークシート演習を通じて確認することで、本児は、「3学期は授業で進んで手を挙げたい」、「もっと先生の話聞けるようにしたい」、「これからもiPadを使って解らないことをなくしたい。」等と言い、前向きな気持ちで頑張ろうとする様子が見られた。

1学期は授業に関する自分で自分から挙手することがあまりなかったが、3学期に授業の様子を見に行くと、毎時間1回は挙手することが解った。本児に授業の様子を聞くと、「授業で答えがなんとなく解ったときに手を挙げている。」「簡単な問題はがんばって解いている。」等、教えてくれた。1学期より安心して1人で授業を受けていることが解った。

・学習や生活の様子、通級時の本児の話やiPadを使う様子からiPadを進んで活用していることが解った。特に「タイマー」や「カメラ」を使う場面が多く見られた。「カメラ」は、板書を写真に撮る(図10)だけでなく、教員や保護者が動画を撮り、自分が活動している様子(図11)を見て振り返りをし「できたこと」や「できなかったこと」を確認することがあった。

図9

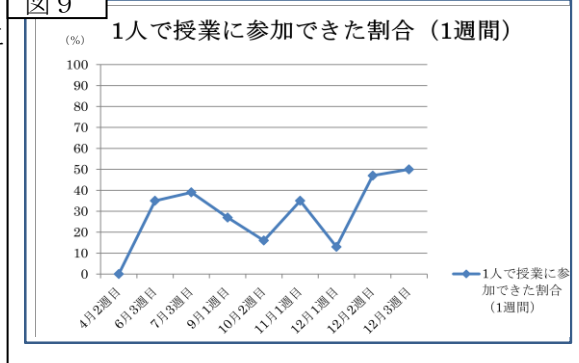


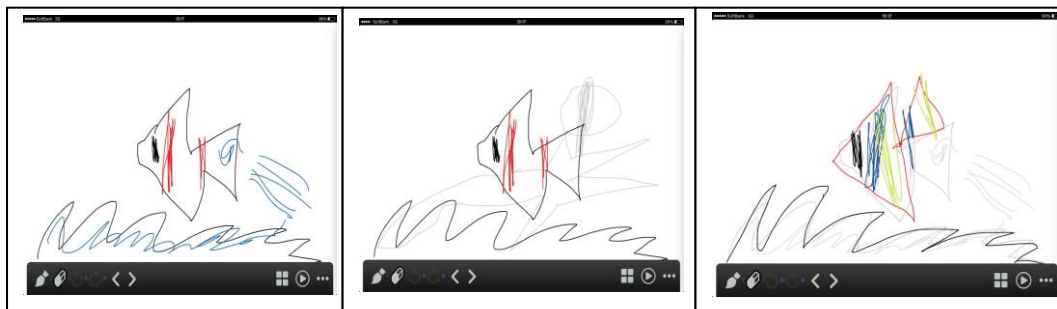
図10 板書を写す様子



図11 動画で振り返り

・その他エピソード(画像などを含めて)

本児の将来の夢は、「生き物にかかわる仕事がしたい」と教えてくれた。保護者と本児と一緒に様々なアプリを使って思いや考えをまとめたプレゼンテーション(図12)を作り、他の児童に見せたり、授業で発表したりしている。以前に比べて、自分から進んで他の人と関わろうとする姿が多く見られるようになった。



「toonic」の一部

図12 プレゼンテーションの一部



「PowerPoint」の一部

図12 プレゼンテーションの一部

通級学級の授業時に「これからも iPad を使って、学校生活を1人で頑張りたい。」と話してくれた。本児がよく使う「カメラ機能」「タイマー機能」「レベルアップ To Do」を中心に継続して使うようにしたいと考えている。学校生活に対する不安をなくしながら、1人でできることを増やしていきたい。